教育実習の報告

今ふり返ってみて

後藤 沙綾
（国際言語・文化学科４年）

はじめに

私は６月10日から６月28日までの３週間、母校の中学校で教育実習を行った。ここでは、私が実習の前に考えていたことや、行っていた準備について３つ挙げていく。

大いに反省して取り組んだこと

本学では、教育実習に行くためには卒業単位を100単位以上取得している必要がある。私は３年後期終了時点で100単位丁度というギリギリのラインだった。普段の生活や、学科専門科目も順調ではなかったため、教職委員の先生と面談を行うことになった。私は普段から「ある程度のことはやって、あとは何とかなるだろう」という楽観的な考え方で生活をしていたので、その結果として、自分のそういう面が単位やその他諸々に出てしまったと大いに反省した。

その面接に至るまで、教育実習に向けての心構えもなく、準備もほとんどできてなかった。ただ「教員になりたい」という気持ちだけだった。しかし「なりたい」だけでなれるほど教員への道は簡単ではない。私は面談をきっかけに、なぜ教員になりたいと思ったのかを改めて考えてみた。それは自分の生徒時代の教員への憧れだった。

実際に中学生の前に立つためには変えていかなければいけないことが多いと痛感した。周りよりも遅くなってしまったが、先生との面接後に指導案を作成する、模擬授業の練習をするなど、自分なりの教育実習に向けての準備をするようになった。そうした自分自身と向き合って考える機会を持つことができて、面談は不名誉だったが、むしろよかったと思っている。

３年生の皆さんの中には教育実習への不安や悩みを抱えている人も多いと思う。周りが行動していて焦る気持ちになる人もいると思う。私は行動を始めるのが実習直前になってしまった。もっと早く動けばよかったと、とても後悔している。３年生で、実習まで時間のある今、「自分はこれからどうしたいのか」「そのためには何をするべきか」一度考えてみて欲しい。

実習にのぞむ準備

私の場合、事前に授業計画を聞くことができたため、教材について調べる時間を多くとることができた。可能であれば早いうちに、アポをとった実習打ち合わせの前に、実習校に連絡して実習担当の先生から教科書の種類や出版社名と年間の授業計画について、どの段階まで進んでいるかなどを聞いておくと、指導案を作成する際に非常に役に立つと思う。

しかし、どれだけ準備していても実際の現場では予想外のことが起こる。生徒からの想定してなかった質問があり、すぐに答える事ができなかった。質問への答えを考えているうちに時間を取られてしまい、自身の知識不足を痛感した。「もっと準備しておけばよかった」と感じている。

実習前の指導案作成にあたって最も悩んだ部分は「生徒観」であった。「生徒観」は現場で生徒たちと実際に接するまでイメージしづらかった。今思えば、指導案作成にあたってそれまでの大学での授業で何を学んだのかをしっかり整理しておく必要があった。指導案の「生徒観」以外の部分や教材研究や発問の工夫など、できる限り模擬授業で練習するなどして実習前に内容を深めておくと、充分でない「生徒観」を補うことができたのではないかと感じた。臨機応変に対処できるよう、できる限り教材へ

の理解を深め、知識を蓄えておく事が大切であると思う。

普段が活きる

生徒とコミュニケーションを取る際には「大学では普段何しているの？」「普段はどんなことに興味あるの？」と聞かれる事が多かった。私は音楽系のサークルに所属しており、サークル活動での話をすると興味を持つ生徒が多かった。

話のきっかけを作る事ができれば、生徒からもこちらに話しかけやすいのではないかと感じた。勿論、生徒の様子をみて、声を掛けるなどはこちらからもしなければならない。サークル活動に限らず、ニュースを見る、新聞を読むなどして、多くのことに興味を持って吸収しておくと、コミュニケーションのきっかけとなり、役に立つと感じた。

「教育実習生」というだけで中学生は興味を持って接してくれる。しかし、「教育実習生」でなく実際の教員になった時、授業や他の活動などで、生徒がこちらに興味を持つためには、日々様々な話題やジャンルの情報を積極的に吸収している必要があり、また生徒も楽しい人と感じてくれるのではないかと思う。

おわりに

以上３点が、今、ふり返ってみて言える事である。

実際の教育実習では学ぶことも多く、教育実習そのものは非常に重要だ。しかし、これから皆さんが過ごす教育実習までの時間もとても大切で、この期間をどう過ごすか、何を準備するかで実習がどれだけ充実したものになるかが変わっていく。実習までの時間は長いようであっという間に過ぎていく。その時間をどのように使うかを考え、大切に過ごして欲しい。

何のために叱るのか

麻生　彩花
（史学・文化財学科４年）

はじめに

５月下旬から３週間、母校の中学校で教育実習を行った。教科は社会、担当学級は２年２組だった。授業は２年生の歴史的分野を担当し、計15回行った。ここでは、授業や生徒との日頃の関わり方などを通して学んだことを報告する。

教育実習初日から抱いた不安

教育実習初日、私を含めた３人の実習生を紹介するための集会が行われた。教頭先生の話を後ろで聞いていたところ、生徒たちの中には実習生が来ていたということもあり、落ち着かずソワソワして、私語をしている姿が一部に見られた。この初日の集会だけでなく、先生方の授業観察の際にも、そうした生徒たちの落ち着かない様子が見られた。教員が注意したときにはやめるのだが、またしばらくしたら話し始めるという繰り返しだった。私が感じたことは「実際に授業を行い、このような場面に遭遇した場合どのようにしたらよいのだろうか。」という不安だった。私には、生徒に対して厳しく注意できる自信もなかった。

私語をする理由、その対応への戸惑い

これまでの中学・高校生活を振り返ってみてもらいたい。授業中などに私語をしたことがあるだろうか。なぜ生徒は授業中に私語をしてしまうのだろうか。

私は授業観察などをもとに、生徒の気持ちになって考えてみようと思った。その理由として考えられるのは、第一に授業内容に対して興味が持てない、理解できないことだと思われる。実際に生徒に「数

学の授業どうだった？」と聞いてみたところ「授業が分からない」「内容が難しい」などと感じている子がたくさんいることに気づいた。また、とある若い女性の先生の授業で比較的私語が多いとみられた。生徒たちは、先生によって私語をする授業を選んでいるのかもしれないと感じた。

1週目の最後の日から授業を行った。その日は指導教諭が後ろで観察していたため、比較的私語も少なく終わった。実習初日に抱いていた不安ほどではなかったので少し安心した。

しかし、3回目の授業を行ったとき指導教諭が少し席を外した瞬間、何人かの生徒たちが話し始めた。私は驚いてしまい、その時はどうしたらよいのかが分からなかった。まだまだ授業を行うことに対して精一杯な状態だったので、生徒の私語に対応することができなかった。

また、その日の清掃時間では、持ち場を離れて友達同士で話していて掃除をしていない生徒がいた。その生徒に掃除をするように促してみたが、優しい言い方であったためか、生徒は注意されたと感じていない様子だった。そのとき、優しいだけでは駄目だということに気づかされた。生徒たちからは「先生は一番優しい」と言ってもらっており、嬉しかった半面、本当にこのままでよいのだろうかという焦りが生まれてきた。

子どもたちの成長を願う教員であるならば、どうするべきだろうかと試行錯誤するようになった。

「叱る」ことと「助言する」ことのあいだ

生徒を指導することに対して、不安があるということを指導教諭に話したところ、次のように教えてもらった。「怒る」と「叱る」の違いである。

「怒る」は怒りの感情をそのままぶつけることであり、「叱る」は子どもによりよい方法を教示することであるから、両者は全く違うものである。もし厳しく注意することに抵抗を感じるのであれば、生徒に対して「こういうふうにしたらどうかな」など助言をするようなことから始めてみたらどうだろうか」という指導を受けた。この方法なら、私にもできそうだと思った。

担当学級の生徒たちはとても明るく、授業でもたくさん発言してくれるので、私はこの子たちのためにも変わりたいと思うようになった。それから、授業を担当するクラスの生徒全員の名前をできるだけ早く覚え、休み時間などを利用して、部活動や習い事で子どもたちが頑張っていること、今悩んでいることなどの話を聞いたりするようになった。

2週目、指導教諭に言われたことを意識しながら実践してみようと思った。その週は、朝の会や帰りの会を任されていた。そこで、班の反省点に「私語が多かった」というのがあげられた。そのとき生徒たちに、「授業中などに私語が多くなると、しっかり授業を受けている人たちはどう思うかな？相手の立場になって考えながら、行動できるようになるとよい人間関係を築けるようになるかもしれない」という話をした。子どもたちの心に響いたかどうかは分からないが、話をしっかりと聞く姿勢を見せてくれた。

指導教諭に報告したところ、「生徒たちが先生の話をしっかり聞いてくれたのは、これまでコミュニケーションを取ることができていたからだと思う。先生が子どもたちのことを分かろうとする姿勢が伝わっていたのではないかな」との言葉をいただけた。

最初は不安に感じていたことも、他の先生方と同じやり方ではなく、自分なりの方法も見つけていくことができるのだと学ぶことができた。

おわりに

実習を通して最も難しいと感じたのは、生徒との距離感である。友だちのような関係になってしまうと、指導がしづらくなってしまうからだ。私にとって、一番の難しさはそこにあるのではないかと感じた。

とはいえ教育実習を通して、自分の欠点を克服する一歩を踏み出せたと思う。そのために、どんなことにも挑戦してみようという気持ちをもつことができた。生徒指導は教員になったら必ず行わなければならないものである。そこには、生徒の成長を願い、

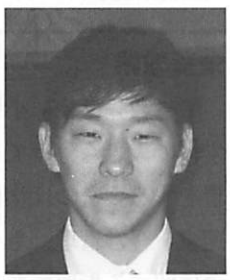
同時に厳しさを求められる場面もあるだろう。教員として学校現場で働くときは、そのことから目をそらさずに真摯に向き合っていきたい。

また、問題行動が生じたとき、その背景には生徒たちのどのような気持ちが隠されているのか。実習を通して、真剣に考えることができた。それは生徒の気持ちに寄り添って、理解しようとすることである。そういった行動が信頼関係を築き、日々の授業や活動などをより充実したものにできるのではないだろうか。

生徒指導のスタート地点

城岩　秀幸
（史学文化財学科４年）

はじめに



私は５月21日から６月７日までの３週間、故郷の出身中学校で実習を行った。３年生のクラスを担当し、授業は「道徳」と「社会」を合わせて６回行った。正直に言えば、私は授業が苦手で、史学文化財学科の学生だが、あまり歴史のこともわからない。しかし、高校時代の先生に憧れて教職課程を履修した。履修中に教職履修の仲間達が次々と辞めていき今では民間の就職先を勝ち取っているが、私自身も民間企業に就職するのか先生になるのか迷っていた。そんな中、不安と緊張とワクワク感、また２つの目標を持って教育実習に臨んだ。１つは当たり前だが、一生懸命やること。もう１つは、ドラマや漫画でみるみたいに、実習先の生徒と最後の日に感動の別れをして、惜しまれながら見送られることだった。

中学生とはどういう生き物なのかを知ることだ

教育実習初日に校長先生から「中学生とはどういう生き物なのかを知ること」だと言われた。皆さんが中学生の時を思い出して欲しい。先生の言うことをなんでも聞く生徒だっただろうか？必ずしもそうじゃなかったのではないだろうか。もちろん真面目に勉強に取り組む生徒や部活に打ち込む生徒がほとんどだと思う。しかし、そういう生徒だけでなく、悪いことをしてみたり、人に迷惑をかけてみたり、普通に考えたら無茶苦茶なことをやってしまったりすることもあると理解する必要があると思う。理解することによって、自分自身が変に悩みすぎず、例えば言うことを中学生が聞かなくてもそういうものなんだなと捉えられて、自らの指導が悪いからだと自身を責め過ぎないことにも繋がると思う。

また、中学生がどういう生き物なのかを知ることによって、どういった指導の仕方をすればいいのかにも繋がるということを学んだ。中学生の時にしっかりした心ができていたかと言えば、そうではない人が多いと思う。生徒が何か問題を起こしたり、様子がおかしかったりした時、そこには、家庭に何か問題があったり、友達などと何かあったりと、見えない何かが起こっている可能性が高いと思われる。そうした原因を話の中で聞いていくことが大切だということを理解した。

オリジナルの座席表

クラスの中にはあまり積極的に話をしてこない生徒やほとんど喋らない生徒もいる。そういう生徒に対して意図的に話しかけるという働きかけをした。理由は簡単で基本的に自分からコミュニケーションを取っていかないと、話してくれないからだ。

自分から話しかけていくと意外とよい反応があった。そうした会話の中で一人ひとりに小さいことでも個性があったりいいところや、いじりたくなるようなかわいいところがあったりすることに気づいた。また、給食の時間に話したり、昼休みにみんなで腕相撲をして遊んだりした。そうして、クラス全員とコミュニケーションをとる中で一人ひとりが「好き」だという気持ちになっていった。

実習期間中に行われた中体連では、野球部の応援と卓球部の応援を見に行き、みんなの活躍や成長した姿をみることができてとても感動した。「いつ

もおとなしいあいつがあんなガッツポーズするんや！」とか「あいつ、最後まで頑張ってるな」と全員の活躍を心から喜ぶことができた。それは恐らく、日頃からコミュニケーションをとって一人ひとりのことを「好き」になっていたからだと思う。生徒の成長を目の当たりにすることは教師のやりがいの一つだなと思う。

生徒と最初の時に打ち解けられるか不安だと思う。自分も人見知りなので結構不安だった。そこで自分が実践したのが、実習生である私のためのオリジナルな座席表を作ることだった。一人ひとりの名前の下に、自分の好きなものとか、休みの日に何をしているかとか、ニックネームは何かとか、なんでもいいので書いてもらった。思った以上にどんどん名前も覚えられるし、何より生徒の何気ない情報を書いてもらうことで、話題が広がり、生徒の心に一歩踏み入ることができた。

教室に「世界」をつくること

授業の前に早めに教室に行くようにしていた。授業前に生徒と話して、「今日の授業はこんなことやるよ」とほのめかしたり、「この前の授業で何したか覚えてるか？」と尋ねたりして、生徒の気持ちを授業に向かわせることを狙いとしていた。どうしても、休み時間と授業の切り替えのところは生徒たちがだらけてしまいがちである。生徒達を席に着かせて、授業ができる態勢を作る事で、スムーズに授業に入ることができる。授業するのがとても不安だった私も、早めに教室に行って、生徒達と話すことによって、緊張が和らいだり、「よし頑張ろう」と気持ちを整えたりする事ができた。

終わりに

実習は、授業はもちろんですが、生徒と関わり、先生という仕事を体験できる貴重な時間だ。空いている時間を見つけては生徒と話したり、遊んだりしてもらいたい。生徒もきっと応えてくれると思う。生徒指導というのは、生徒と仲良くなって、心を通わせる事がスタートだと思う。ここでいう「仲良し」は生徒との信頼関係に支えられたものだ。

誰かのために仕事をすることは、これほどまでにやりがいを感じるのだと非常に思った。教育実習に行ったらわかると思うが、夜の９時とか10時とかまで残っている先生は沢山いる。それは、そこにやりがいを感じているからだと思う。私も一回だけ授業の準備で徹夜した日もあった。それでも全く辛くなかった。とにかく、色々迷っている人もいるだろうが、教職を履修し続けていくのは大変なことだと思う。しかし、「とりあえず行け！」というのを皆さんに伝えたい。

子ども目線

佐藤　友季
（食物栄養学科４年）

栄養教諭

栄養教諭は主に小学校と中学校で大きく分けて２つの仕事をする。一つは学校給食の運営・経営管理、もう一つは食に関する指導である。給食の時間や給食だより、さらには「特別活動」や「総合的な学習」の時間、「家庭科」や「保健体育」などでの授業を通じて児童・生徒に指導する。私は、実習期間１週間で、小学校４年生の２クラスで１時間ずつ授業を行った。ここでは、その授業準備について述べたいと思う。

わかるかな

(1)読む速さ、書くのにかかる時間

授業準備に欠かせないのが対象クラスの実態の把握である。すでに事前打ち合わせの段階で私の授業テーマが伝えられ、学習指導案も作成していたが、この段階では、全国的なデータをもとに仮説を立てて作成していた。食に関する指導は、「食」がいかに「実生活」に身近なものであるかを伝えることが重要なので、具体的な部分は児童へのアンケート調

査の結果を集計してから変更しようと考えていた。実習初日に、「授業は４日目の１時間目に１組、２時間目に２組でする」ということが決まったため、２日目にアンケート調査を行った。

しかし、実際に児童にアンケートを行ってみると、その内容よりも、彼らの文章を読んだり、文字を書いたりするのにかかる時間を軽く考えていたことがわかった。もちろん、大学生よりスピードが遅いことは分かっていたが、実際は想定していたよりも時間がかかってしまった。そこで、すぐに指導案の内容を削り、ポイントを一つに絞った授業に変更した。２日目のうちにアンケートの集計と指導案の再考案の作成を終わらせ、３日目に指導教諭に最終チェックをしてもらった。追加の媒体などを作成し、４日目の本番に挑んだ。

⑵「この漢字習ったよね」「算数でやっているよね」

私は、授業準備において常に心がけていることがある。それは、対象クラスの子どもたちが、どの教科でどこまで学んでいるのかを知ることだ。最もわかりやすい例は、漢字だと思う。牛乳の「乳」の字は何年生で習うのだろうか。６年生である。私はこれを知った時、驚いた。小学校１年生はひらがなやカタカナですら慎重にならなければならないが、中学３年生ではある程度の漢字、英語は通用する。

私たちが普段何とも思わずに使っている文字でも、子どもたちに適切な授業を作るためには、「きっと習っているだろう」という憶測では不十分である。板書やワークシートを作成する際には、学習指導要領の「学年別漢字配当表」と照らし合わせるようにしていた。他にも、ミリリットルやグラム、パーセント等の単位も同じように気をつけていた。これは、大学で習慣づけていたので、実習先でも困ることはなかった。

どの教科でどこまで学んでいるのかの把握は、文字や単位に限らず、各教科の授業でも同じだと思う。「この前、この漢字習ったよね」「今、算数でやっているよね」。これは、実習での授業観察でよく耳にしていたワードである。該当教科ではない授業でも他教科の内容を関連させていることがわかった。いろんな場面で繰り返し指導することは、授業を関連させるためだけでなく、いろいろな場面で繰り返して短期記憶を長期記憶へと導くためでもあるということを学んだ。

食の教材化

小学校は各クラスの担任が毎日、毎時間授業をするのが基本であるため、栄養教諭は飛び入り参加のような形で授業をしなければならない。「食」は生活全般において関わってくるので、大きく考えれば、どの授業とも関連させることが可能だろう。事前に学級担任に確認しておき、学校行事を見ておく等、工夫が必要だと思った。

さらに、忘れてはいけないのが「給食」である。学校給食は必ず活用すべき題材である。児童・生徒が毎日欠かさず触れる、共通の教材でもある。子どもたちの印象にも残りやすく、また、一言「給食」の言葉を添えるだけで、身近なものとして聞いてもらえる。他人事ではなく、自分のこととして捉えさせることが食に関する指導の第一歩だと思う。分かりやすく、イメージしやすい教材を用いて、授業準備を進めることが重要だと感じた。

引き出しを多く持つということ

また、授業を成り立たせるためには、授業内容だけでなく、児童との信頼関係が欠かせないと気づいた。授業観察をしていると、グループワークでの盛り上がりや挙手が多いのは、特定の教科担当教員の授業よりも、クラス担任の授業だったように思う。児童との距離を縮めるにはまず名前から、と思い、最初の２日間で４年生全員の名前と顔を覚えた。

児童一人ひとりの特徴を捉えていくうちに、「こんな質問の仕方だったらわかりにくいかもしれない」「こんなことに興味があるんだ」と、徐々に小学生の感覚がわかるようになってきた。時代も変化し、私との年齢も10歳以上離れているので、驚くことも多かったが、普段の会話や流行に関心を持つことも授業準備の引き出しとしてたくさん持っておいて損はないな、とも思った。

おわりに

実習に臨むにあたり、ぜひやって欲しいことがある。それは、大学での模擬授業を丁寧にこなすことだ。教育実習の準備にかける時間はほとんど教職の授業でしかとれなかった。他の人の模擬授業を見ている間も、「今の言い回しいい！」「その流れで話すと伝わりやすいんだ！」など、気づいたことはすぐにメモして、自分の授業に活かした。

どんな時間も無駄にしないこと、どんな小さな気付きでも自分のものにすることが大切だと思う。あくまでも授業を受けるのは児童・生徒である。子どもたちの価値観や習慣、能力などを丁寧に見極めて、子どもたちの目線から授業準備に取り組むことを勧めたい。

繰り返すなかで失敗し、そこから学んで又くり返すこと

野田 琳愛
（国際言語・文化学科４年）

はじめに

５月23日から６月12日までの３週間、１学年８学級ある母校の中学校で教育実習（「国語」）を行った。担当した学年は主に１年生で、８学級中４学級で計22回授業を行った。ここでは、授業実践の取り組みについて「授業をするまで」と「授業をしてから」の考えの違いや、授業実践することの難しさ、授業実践を行った際の工夫などを述べる。

「授業をするまで」と「授業をしてから」

教育実習が始まる一週間前に実習校での打ち合わせがあった。打ち合わせでは担当する学年、学級、授業時間割などを聞いた。その後、担当学級の担当教員との打ち合わせが行われ、そこで初めて教科書のどこを授業するのか、何回授業するのかが分かった。この時点では「飛べ　かもめ」という３時間構成の物語を４学級で行う計12回分の授業の予定が決まっていた。

初日までの１週間で12回分の授業の学習指導案を作成し持参することが課題とされ、正式に授業準備が始まった。

今まで大学で学んできたことを最大限に活かそうと、大学で学んだ通りに学習指導案を作成し、授業の進め方や時間配分まで考えた。しかし、初日に提出したその学習指導案は、最終的にほぼ原形がなくなるほど訂正を繰り返すことになった。

２日目までは担当教員に付いて授業の観察を行った。授業実践が始まったのは教育実習３日目からであった。自分で用意した学習指導案に基づき授業を行ったが、今まで大学で模擬授業を行っていた際には起こらなかったハプニングが想像以上に多く起こってしまった。

「分かる」と思っていたことがほとんど「分からない」のが１年生である。中学１年生は小学校を卒業してまだ間もないので、言葉の意味を理解できないことが普通レベルなのである。例えば、「描写」という言葉が分からず簡単な言葉で言い換えたり、授業実践の度に分からない言葉が出てきては国語辞典を開いて説明をしたりと思いのほか授業時間を費やしてしまい、予定していた時間では授業を終わらせることができなかった。

担当教員にも「１年生は小学生と同じだと思って分かりやす過ぎるくらいの授業を準備していた方がいい」とアドバイスされた。

中学生を相手に授業をするまでは、大学で学んだ通りに授業を実践すれば、全部はうまくはいかずとも、形にはなるだろうと甘く見ていた。実際はそんなに甘くはなく、授業実践を始めてからの毎日は授業で障害物競走をしているかのような気持ちだった。授業実践を甘く見ていた自分を何度も叱りたくなった。

授業実践を繰り返して

この教育実習２週目からは毎日、生徒が下校した16時半頃から日誌を書き、18時頃から20時頃まで職員室で担当教員とともに、その日の授業実践の反省会をするのが日課になっていた。毎日訂正を繰り返している学習指導案も、毎日改善している授業実践も、毎日夜中寝る時間を削って頑張った授業準備についても、褒められることも認められることも一度もなく、毎日「逃げたい」と思うようになっていた。「負けたくない」「頑張りたい」という気持ちと「逃げたい」という気持ちが葛藤して帰り道に泣いてしまうこともあった。

担当の授業は毎日２コマから３コマほどあった。物語の授業、文法の授業、活字の授業、詩の授業、道徳の授業などを行ったが、簡単な授業は一つもなかった。学習指導案を作成せず、授業の前の休み時間に、急に「やってみて」と言われ、担当教員の授業を見よう見まねで行うこともあった。

授業実践を始めて、すぐには要領をつかめず、何がダメだったのかも、何をしていいのかもわからず、反省会で助言を待つばかりだった。しかし、授業実践を繰り返すにつれて、少しずつ自分なりに工夫ができるようになった。

例えば、どの授業をするのにも国語辞典を持参し、授業で使用する語句は全て調べて付箋を貼って準備をするようにした。すると、生徒から語句についての質問があった際に慌てず、すぐに対応できるようになった。他にも、漢字の筆順に不安があった私は板書する予定の漢字を一文字一文字調べてみたり、ワークシートはどこに何を書いたらいいか分からなくならないよう、板書と同じ形にしたり、物語に出てくる分かりにくい描写では、ドラマや漫画などの例えを出して理解させたり、全員が授業に参加するように音読の時間や隣同士で話し合う時間を作ったりした。

こうして、少しずつ工夫ができるようになると、担当教員にも少しずつ褒めてもらえるようになった。それがまた自分の自信につながり「明日の授業も頑張ろう」という気持ちにさせてくれた。

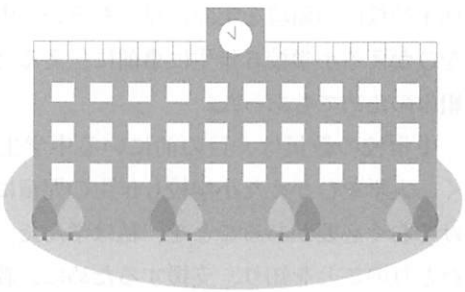
授業実践で失敗を繰り返したからこそ「どうして失敗したのか」「どうしたらよかったのか」と考える時間ができ、自分なりに工夫ができるようになったのだと思う。そう考えると授業実践を結果として22回もさせてもらえたこと、授業実践で失敗したことが自分のためになったのだなと考えることができるようになった。

おわりに

私は教育実習までの教職の授業でも自分なりに工夫し、学習指導案の作成も授業実践もある程度のレベルに達しているものだと思っていた。しかし、大学生を相手に模擬授業をするのと、中学生を相手に授業をするのでは大きな違いがあること、今まで自分が教育実習へ向けて行なってきた準備では全然足りていなかったことなどをこの３週間で実感することができた。

教育実習での授業数は、学校によって異なるが、できるだけ多く授業を実践して学んだ方がいいと思う。教育実習とは、これまでの期間にどれだけ練習をしたかが試される場である。

教育実習へ向けてまだまだ準備ができる期間だからこそ、教育実習へ行って後悔することの無いよう、自らが納得のいくまで、できるだけ沢山の練習を重ねてほしいと思う。



なぜ「チーム」なのか

楠元　里奈
（史学・文化財学科４年）

はじめに

私は生徒数が950名、教員が70名を超える母校の中学校で夏休み前の３週間、教育実習を行った。私は授業や部活動のみならず、先生方の研究授業、研修、会議にも参加し、指導教諭をはじめ様々な先生方と交流を図った。その経験から学んだことについて報告する。

幼小中連携

今日、小１プロブレムや中１ギャップ等の問題から、校区の学校間の接続が重要視されている。その取り組みの一つが幼小中連携である。これは、教員が近隣における異なる校種の学校で、授業観察と情報交換、協議を行うものである。私の実習先の中学校には、主に小学校の先生方が出向いていた。

入学した生徒の抱える問題の兆しがすでに表出されていることに中学校教員が気づけていない場合が多い。小学校の先生方に生徒の授業中の様子を見てもらうことによって、小学校卒業後に異変がないかを確かめてもらう。その指摘を受けて、放課後に会議が行われていた。

その会議では、何かしらの問題をもつ生徒のことなど早めに引き継ぐべきことについて、小学校６年生のときの児童の情報を小学校教員から中学校教員に伝えていた。逆に小学校の先生に中学校の授業の様子や校内の環境を実際に見てもらい、中学校入学をひかえる小学校６年生に事前に伝えるという取り組みのためでもあった。

中学校の教員は、目の前にいる中学生だけでなく、入学をひかえた小学校６年生の児童にも目を向けておく必要があることを、私は学んだ。生徒一人ひとりのことを知り、支援するために、教員は校種を超えて縦の糸でつながり、地域一帯がチームとして動いていることを実感した。また、確実に児童生徒の情報を共有するためのコミュニケーション能力が教員には欠かせないと改めて思った。

心肺蘇生法実技研修

もうすぐ体育の授業で水泳が始まるということもあり、心肺蘇生法実技研修があった。講師として消防署の方々を招き、電子黒板を使った映像による説明の後、マネキンで心肺蘇生法を実践した。

私が驚いたのは、参加者のなかには教員だけでなく、保護者や地域の方々がいたことである。研修では、「水泳の授業や夏休み中のプール開放で事故があった際、近くの大人が確実に子供たちの命を救えるよう、地域という枠で心肺蘇生法を学びましょう」という話があった。

また、質疑応答の時間では、先生方は具体的な事故のケースを想定した質問をしていた。今の私では想定しきれなかったケースを先生方が考えている姿を見て、自らの未熟さを痛感した。教師として長年勤務するなかで、最悪の事態を想定する力、そしてシミュレーションによる対応力を身につけ、学校の安全管理を行う必要があると強く思った。

市授業研究会

実習先である母校は大規模校ということもあり、市の研究授業の会場校に指定されていた。他校の先生方が多く参加していた。このような大きな研究授業の場合、研究会当日の授業担当者は各学年１人であっても、教職員全体で学習指導案について何時間もかけて検討する。検討する中では授業担当者以外も事前に授業を実践し、指導案の改善を重ねることを知った。

先生方は多忙な中、なぜそこまでするのか不思議に思い、指導教諭に尋ねた。これにより、指導教諭の言葉の中で、本意は「生徒」のためであることはもちろん、結果として、わざわざ足を運んでくれた「観察者」に授業の在り方について考えを深めてもらうという「研究授業」の意義に気付かされた。

私も実習中に研究授業を行ったが、振り返ってみると、授業者である私が授業の在り方を研究し、なんとなく普段より力を入れたに過ぎない授業となって大いに反省した。また、観察者が「なるほど、これは勉強になる」「参考にしよう」と思えるような授業を作ることは決して容易ではなく、自分にとってこれからの課題になると感じた。

終了後は、授業に関する会議が開催され、50名近くの教員が質問や話し合いを行う。質疑応答で関心をもったのは、先生方は教授法のみならず、授業中の生徒の集中力や挨拶、返事、学級の雰囲気等など細かに観察し、質問していたことである。

例えば、「どうすれば、生徒が発表した後に自然と拍手が生まれるような雰囲気がつくれますか」といった質問が出ていた。教員としての経験がない私には、研究授業後の質疑応答で生徒について質問されるということまで想定できていなかった。

さらに、多くの先生方は「自分の勤務する学校・学級では、このような点で問題を抱えているのですが」と、教員としての悩みも質問の中に含まれていた。

十人十色な生徒を見ている"教員"が多く集まる場で質問をすれば、様々な意見や解決策、またこれから教師として共に考えていかなければならない課題を明確にすることができる。積極的に発言する姿勢が大切であると感じた。会議や研修においても、常に学級経営や生徒指導の視点をもつことが、教師としての資質を向上させるうえで必要になると感じた。

おわりに

このように、先生方は生徒からは見えない部分で多くの人と意見を交換しながら、授業や生徒指導の在り方を常に考えているということを、実習生という立場から身をもって実感させられた。

来年度、教育実習へ行く皆さんは、教師・生徒間のコミュニケーションの様子はもちろん、教師間のコミュニケーションや取り組みを積極的に見て欲しいと思う。これは大学の模擬授業、机上での学習では得られない機会である。そして、その際には、コミュニケーションや取り組みの背景について考えを深めてもらいたい。

昨今、教育界ではいじめや不登校、児童虐待等の課題、そして主体的で対話的な深い学びやICT教育などの新しい動きが見られる。これらはどれも一人では解決しきれないものであると私は考えている。4月からは、チーム学校の一員であるという自覚をもちながら、1人でも多くの生徒の学び・成長を支援する教師となる所存である。

「想い」

本間 有馬
（史学・文化財学科4年）

はじめに

私は6月10日から6月28日までの3週間、母校の中学校で教育実習を行った。担当は社会科、2年生5クラス全てで、計9回授業実践を行った。昼休みには他学年の生徒とコミュニケーションを取り、和やかな雰囲気で、学年を問わず生徒と関わった。担任クラスでは、学級事務の他に短学活、給食指導、総合学習、道徳の研究授業を行い、部活動は卓球部を担当した。ここでは、実習を終えた今の想いを中心に、教職の素晴らしさを述べる。

「実習生」＝「先生」

実習初日の朝、実習生として3週間お世話になります、という気持ちを胸に全教職員と全校生徒に自己紹介を行った。その後、管理職や校務分掌主任の先生方から講話を聞いた。

ある先生が口にした一言が私の気持ちを強くした。それは、「あなた方は、教職員から見れば実習生だが、生徒から見たら先生に変わりない」ということだ。つまり、他の教職員と同様な生徒との接し方で、過ごさなければならない。年齢が近く、つい

生徒はため口を使うなど友達感覚で接してくる。しかし、先生としてきちんと指導していく必要がある。実習生だからという甘い気持ちではいけないということを痛感した。

信頼関係

担当した２年生はどの先生方も太鼓判を押すほど、真面目な学年で、授業中は積極的に発言し、生活態度も非常に良い。驚いたのは授業開始２分前、職員室から３階の教室に向かう途中、１、３年生の教室からは元気の良い声が響き渡るが、２年生教室に来ると静かで、どのクラスも黙想をしていた。指示を出さなくても、自分から率先して動くという私が中学生の頃とは考えられないものだった。

しかし、クラスごとに見れば課題もある。担任した２年５組は一人ひとりの人間性には全く問題ないが、挨拶の声が小さい、集会後の退館の際、クラスごとに呼ばれると、返事ができず、やり直しをさせられていた。実習３日目の短学活で、私からある注意をしたが１時間たった後には忘れてしまっていた。指導教員からは、「３週間、本間先生にクラスをお任せします」と初日に言われていたため、今の私に何ができるか毎日考えた。

生徒と距離を縮めるために、やり取り帳を通して、一人ひとりと距離を近づけ、信頼関係を作った。また、黒板の左端に「返事」「挨拶」「ON＆OFF」「思いやり」と板書し、朝と帰りの短学活でも呼びかけた。すると、実習３週目になり、見違えるほど返事や挨拶ができるようになり、他の先生方も驚かれていた。生徒からは、「声を出すことに自信がついた」「毎日気持ちよく過ごせるようになった」と言われ、私の想いが生徒の心に響いたのだと思った。生徒たちが素直に私の言葉を受け入れ、実行してくれたことは嬉しかった。生徒指導は生徒との信頼関係があってこそ、成り立つものだ。このことは、普段の授業の中でも求められる。

リアル体験

授業において教材研究は欠かせず、教師の説明がふらつくと生徒の学びも安定しない。内容を精選して、いかに生徒が理解できる授業にするかが求められる。だが、内容を教えるだけなら塾でもできることだ。大事なことはその教師にしかできない話で、生徒を引き寄せ、学びを拡げることではないかと考えた。

実習期間中、社会科の地理的分野の授業を行った。最初のクラスでは、内容の伝え方や発問の仕方が上手くいかず、失敗に終わった。どんな伝え方をすれば、社会科を好きになってもらえるか。そのためには、一人ひとりに授業内容が人生や生活に関係があるものだということを認識させることが大切だと考えた。

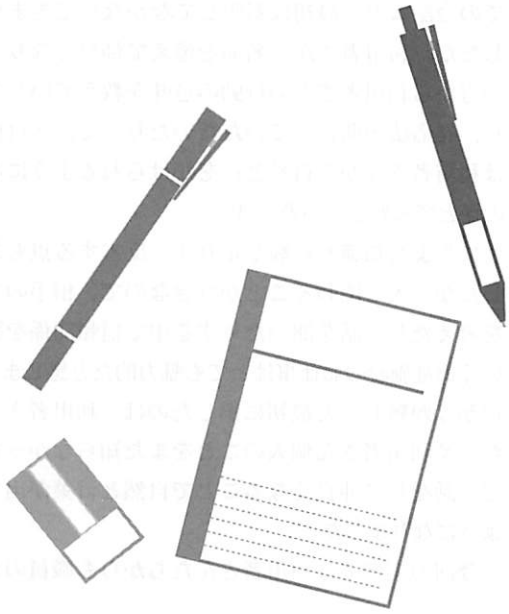
そこで、体験した話を交えながら授業を進めた。特に、「自然災害と防災」については、自分の体験談を交えることで身近な出来事であることを伝え、「災害が生命や財産を簡単に奪ってしまう」ということを理解できるように進めた。生徒自身が今からできることは何かを個人やペア、グループで考えさせた。実体験から教師の思いを伝えることは、生徒の心に響き、これが新学習指導要領でも示されている「主体的・対話的で深い学び」に繋がる。実生活の中で「どう使うか」が今後求められるだろう。

教師の想いがつまった話は大切であり、そのために「引き出し」をたくさん作っておく必要がある。教科書の内容を教えることは基本だが、生徒が内容を理解し、自分と関係があるという認識を持たせることが重要だ。また、生徒にとっては１回きりの授業のため、念入りに準備をした。特に、道徳の授業は教科以上に準備が必要だ。教師も最初から思うような授業ができず失敗することもある。生徒からは「本間先生の授業は分かりやすいし、面白い」「社会がこんなに楽しいとは思わなかった」と感想をもらったが、私の中ではまだまだ未完成だ。生徒の実態に合わせて、どんな授業を展開し、想いを伝えていくか。その試行錯誤の中で、教師自身も成長していくと思う。

粘る覚悟

「不登校」が実習校の課題であった。不登校はいわゆる問題行動ではないが、日本全国での課題だ。担当した学年のどのクラスにも１人以上は必ずいた。毎日多くの生徒を相手に授業や生徒指導、その他の業務など多忙であるが、どの先生方も不登校生徒を忘れずに、毎日連絡を取っていた。さらに、近くまで迎えに行く先生がいるなど、不登校生徒を含めて在籍している生徒全員に全教員が目を向けている様子は、私が中学生の頃には見たことのないものだった。「チーム」で、１人も見捨てることなく、生徒と粘り強く向き合っていくことが、教師のあるべき姿ではないかと思う。

おわりに

教育実習を終えて、全てが思い出であり、私自身を成長させてくれた３週間であった。教師は忙しい職業であるが、人の成長に携われる魅力的な職業だ。教師の想いが強ければ、その想いは生徒や保護者、地域の方々の心に響く。教育実習を終えた今だからこそ、そう胸を張って言える。反面、もっと生徒と関わるべきだった、教材研究をもっとやるべきだったなど、後悔しても遅いが、来年度以降教員となった時には、これらを課題として、生徒と共に成長していきたい。

今からでもできることを見つけて積極的に実行して欲しい。想いが強ければ強いほど、相手の心には響く。たとえ、生徒から裏切られるようなことがあっても、決して見捨てないで、信じ続けることが大切だと思う。自信を持って教育実習に臨んでほしい。未来を担う子どもたちの教育を私たちと一緒に考え、生徒と共に成長していきましょう。